

若年層における不寛容性と社会的ネットワーク

— 攻撃的志向をめぐる計量分析 —

中山 ちなみ^{*1}・山本 圭三^{*2}

Intolerance and Social Networks in Youth :
Quantitative Analysis Focusing on Aggressiveness

Chinami NAKAYAMA and Keizo YAMAMOTO

本稿は、違法行為や規範を逸脱した者に対する「許せない」「厳罰を与えるべきだ」という攻撃的な感情について検討するものである。このような他者に対して厳しい態度でのぞむ志向性は、「寛容さ」に対立する「不寛容さ」もしくは「厳格さ」として位置づけることができる。この志向性には、他者から受ける不愉快さに対する反応と、枠を外れる者を受け入れることについての価値意識が関与していると考えられる。それゆえ、寛容さ／不寛容さの態度形成には、人びとが他者とどのような関係性をもっているのかという点が深く関わっていることが想定できる。以上の議論にもとづき、本稿では社会関係資源に着目した検討をおこなう。すなわち、いかなる関係資源を有することが寛容性を高める要件となりうるのかという点に関して、計量データの分析によって検討することが本稿のねらいである。

分析の結果、R. パットナムが措定した「結束型」「橋渡し型」の社会的ネットワーク資源のうち、寛容性の醸成に寄与しうるのは橋渡し型ネットワークの根源ともいえる開放性志向であることが示された。ただしその効果は、結束型ネットワーク資源の多寡によって大きく異なりうる。結束型ネットワーク資源が豊かではない場合の開放性志向と寛容性との関連は低い、結束型ネットワーク資源が豊かな場合、開放性志向が低い者はより不寛容・厳格に、開放性志向が高い者はより寛容になるというネットワーク効果の交互作用が確認されたのである。この結果をふまえて、筆者らは寛容性の形成に関して、つながりの経験を蓄積すること、その上でさらに多様なネットワーク資源を有することが重要な意味をもつことを主張する。

1 はじめに

自分と直接の関わりをもたない他者の過ちや逸脱行動に対する「許せない」「謝れ」「厳罰を与えるべき」という非難や攻撃が、近年目立つようになってきた。例えば、芸能人

キーワード：寛容性、結束型・橋渡し型ネットワーク、開放-閉鎖志向

Key Words : tolerance, bonding/bridging network, open/closure orientation

※1 本学文学部現代社会学科

※2 摂南大学経営学部経営学科 (本学非常勤講師)

や国会議員の不倫報道や、未成年者の犯罪やいじめに関する報道などに対しては、「人生終わったな」「実名をさらせ」「極刑でよい」といったコメントがつけられる。あるいは、アルバイト先の店舗のショーケースで寝ている自身を自撮りしてTwitterに投稿したり、「インスタ映え」を気にして一人で入ったカフェで二人分のメニューを注文したりするような行為に対しても、過剰なまでの非難や攻撃がなされる¹⁾。

もちろん、違法行為や規範を逸脱した者に対する「許せない」という反応は、ごく自然なことである。規範の遵守は共同生活の基盤をなすものである。それに反する行為を見逃しては社会の秩序を保つことはできない。犯罪行為は法に則って罰せられるべきであるし、他人を傷つけたり迷惑をかけたりするような行為は非難されるに値する。

ただし、テレビのワイドショーでの芸能人叩きや、“バカッター”に対する多数のネット上のコメントは、仲間内（コミュニティ内）の逸脱者に対する非難・攻撃ではないという点には留意する必要があるだろう。当事者の一人としてではなく、いわば第三者の立場から、外野の者が過激に反応しているという構図がある。そこで問題とされるのは、単に法や規範を犯したということよりもむしろ、「誠意がない」「非常識である」「人としてどうなのか」という感情にもとづいた極めて主観的な理由で、自分の期待に反する行為がおこなわれているという点にあるように思われる。自分自身が直接被害や損失を被ったわけでもないのに、当事者以上に騒ぎ立て、再起不能になるまで貶めようとする態度には、違和感を覚えてしまう。

このような現象は、ごく少数の一部の者のネット上への書き込みが目立っているだけにすぎないのかもしれない。また、ワイドショー等で他の重要な政治問題、国際問題以上に執拗な取り上げられ方をしているのも、それを“ネタ”として消費し、楽しみたい層が存在しているからにすぎないのであろう。しかしそうであっても、近年では、許せない、謝るべき、何としても罰してやりたい、といった感情が非常に簡単に表出されるようになっているのは少なくとも事実だと思われる。

上で述べたような非難や攻撃の中に見出すことができるのは「自分が気に入らないものは、とことん叩いてかまわない」という志向性である。それは、自分にふりかかってくる不利益を許すことができないという意識ではない。むしろそれは「自分にとっての」不愉快さにもとづく反応であり、同じことが他人に起こっても自分に関係しないのであれば見て見ぬふりをすることもできるという性質のものである。だからこそ、第三者、部外者としてとことん叩くことができるのだと思われる。

人びとは「正しさ」「誠実さ」「善良さ」の価値基準をそれなりにもっている。そうした価値基準は生きるうえでの羅針盤でもあり、社会生活における規範ともなるものである。だが、その価値基準が個別に恣意的に適用され、多くの人びとがそれに同調することで、マスメディアやネットの世界を舞台に人が裁かれる。このような状態においては、共同生活の秩序を保持するという規範本来の機能が非常に危ういものになってしまう。

ルール違反をした者を見逃さず、相応の罰を与えることは、共同社会の運営のために必要なことである。しかしながら、罪や過ちを認め謝罪をした者を許し、社会に受け入れるという態度もまた、共同生活を成り立たせるうえでの要件となるのではないか。とりわけ多様性・異質性の高まった現代の社会においては、自分とは行動様式・価値意識の異なる他者を受け入れることが求められる。このように他者を許容・受け入れようとする志向性

を、本稿では「寛容さ」と呼び、逆に、他者に対し厳しい態度でのぞむ志向性を「不寛容さ」もしくは「厳格さ」と呼ぶことにしたい。

では、このような寛容さ／不寛容さ・厳格さはどのようにして形成されるのであろうか。コミュニティ内外の他者に対する寛容さ／厳格さの態度は、人びとの日常的なつながりの中で形成されていくものであろう。すなわち、人びとがどのような関係資源を有しているかという点が大きく関わっていると考えられる。本研究では、寛容さを醸成する要因となりうるネットワーク効果に着目することで、寛容さと人びとのつながりとの関係を確認していく。

2 検討課題の整理と本稿の分析指針

2.1 寛容－不寛容に関わる諸議論

先行研究において、個人の寛容さないし不寛容さを測定しようとする試みがなされているが、その概念定義は必ずしも一定ではない。近年に比較的多くみられるのは、多文化共生社会における寛容さという観点からの実証研究である。それらの中では、「異質な他者を受け入れることができるか」「異質な他者と共同生活ができるか」などが議論の中心となっている。例えば、浅野智彦が「異質な他者への寛容度」として、「職場で一緒に働く機会が増えた方がよいと思う人」「政治・社会のことについて意見が食い違ってもよいと思う人」を複数挙げさせるという質問を設定しているのも、この観点による定義であろう〔浅野, 2011:104-105〕。

他方で、不寛容には厳罰志向という側面もある。近年に顕著にみられる「絶対に許されるべきではない」「とことん罰してやりたい」と断ずる非難・攻撃の背後には、何かしらの配慮も感じ取ることにはできない。罪を償ったのちの更生を期待するようなものではなく、単にばっさりと切り捨てるだけである。このような攻撃性は、厳罰を支持する態度とも共通している。

厳罰志向について、西岡暁廣〔2014〕はその根底に刑罰意識の「熱狂的要素」「規律的要素」「排斥的要素」という3つの要素があると述べている。西岡は、これら3つの要素の中でも特に規律的要素が厳罰意識に及ぼす効果が高いことを指摘している。ここで刑罰意識の規律的要素として抽出されたのは「ささいな迷惑行為も見逃さないことが大切だ」「今日の社会には、より厳しい法律が必要である」の2項目であるが、本稿が注目する厳格さの態度は、西岡のいう規律的要素に非常に近いと考えられる。

では、なぜ厳格な法規範を求めるのかという点、そこには社会を大切に思い、それを守ろうとする意識があるからであると西岡は説明する²⁾。ただし、このような社会性がすべての他者に対して同等に向けられるのではなく、「大切な守るべき社会秩序の内部にいる者への優しさと、そこから少しでも外れた者への冷淡さ」を西岡は規律的要素の基底的心情として見出している〔西岡, 2014:18-19〕。この知見は、寛容さ／厳格さが日常的な関係性の中で形成されることを示唆しているともいえよう。

先に述べたように、寛容－不寛容という変数が指し示す範囲は多岐にわたるため、厳密な定義づけをおこなうことは困難である。本稿においては、上記の先行研究の内容をふまえて「個々人が有する価値基準に反する行為がなされた場合の反応」として寛容であるか／厳格であるか、という志向性を扱うことにする。

2.2 社会的ネットワークとの関連への注目

コミュニティ内外の他者に対する寛容さ／厳格さは、各人の他者との関係のありようが大きく関与していると考えられる。本稿では、他者との関係をとらえる手がかりとして、社会的ネットワークに着目する。

社会的ネットワークと寛容さとの関連を論じた先行研究としては、先に挙げた浅野[2011]の趣味縁の研究がある。浅野は、二次的結社としての趣味縁が、一般的信頼、寛容度、社会参加等にどのような効果をもたらすのかを論じようとした。ここで浅野が参照しているのが、社会関係資本の概念にもとづくR. パットナム [2000] のネットワーク論である。

また、筆者の一人である中山も、パットナムが提示した「結束型」および「橋渡し型」の2形態のネットワーク類型を援用し、それぞれのネットワーク資源を有することで醸成される価値意識についての分析を試みている [中山, 2016]。ここで指摘したのは、以下の3点である。

- (1) 結束型ネットワーク資源を有することで、個別的互酬性、個別的信頼が高められ、そのことが自己効力感をも高める。個別的信頼の高さが一般的信頼の形成へとつながる。
- (2) 橋渡し型ネットワーク資源を有する者は、既存の関係にとどまらず、多様な他者と積極的につながろうとする志向性をもつ。
- (3) 結束型・橋渡し型ネットワークの間には交互作用効果がみられる。すなわち、ネットワーク単独での効果だけでなく、2つのネットワーク効果が組み合わさることで、より社会・政治参加の促進にとって有効な資源となりうる。

前稿において得られた知見のうち、特にネットワーク資源の有無が互酬性や一般的信頼の形成に関与するという点は、本稿の議論にも関わりうる。「自分には直接関係しない」からこそ第三者的、部外者的に事態に参加する、信頼がないからこそ「とことん叩く」ことができる、といったように、上述の事象の背景に互酬性や信頼が関わっていると想定できるからである。では、寛容さ／厳格さの態度は、両ネットワークにどのように位置づけられるのであろうか。社会参加において確認されたのと同様のネットワーク効果が、寛容さの醸成についてもみられるのだろうか。本稿では、この点を中心に検討をおこなっていくことにしたい。

2.3 本稿の検討課題

パットナムの議論に従うならば、寛容さの形成については、以下の①～④が仮説的に想定される。

- ① 同質的な親密ネットワークである結束型ネットワークにおいては、個別的信頼が形成される。また、個別的互酬性規範は相互に助け合う「お互い様」意識を高める。これらのことは、ネットワーク内での個別的寛容さに結びつくであろう。
- ② 一方で、同質的な者どうしの結束を強めることは、異質な者の排除につながる。また、個別的互酬性規範は、ネットワーク内の秩序を乱した者への風当たりを強めると思われる。したがって、結束型ネットワークにおいては、「自分たちの」価値観や気分と相

容れない者を許容できない、受け入れることができないという厳格さも形成される可能性がある。

- ③ 開放性をその特徴とする橋渡し型ネットワークにおいては、異質な他者とも広く結びつこうとするその志向性が、多様な行動様式や価値観の存在を認め、異質な他者への寛容さにも結びつくであろう。したがって、橋渡し型ネットワークにおいては、より一般的な寛容さが醸成されると考えられる。
- ④ しかし、多様で異質な者どうしが結びつく橋渡し型ネットワークにおいては、その秩序を維持するために「規範を守ること」の重要度も高まる。したがって、規範遵守意識もまた強くなり、規範を逸脱する者への厳格さも高まることが予想される。

両ネットワークは①③のように寛容さを高める効果をもちうる。しかし、結束型ネットワークにおいては、その強い紐帯ゆえに、秩序維持のためにメンバーの規範遵守の圧力が強まる。他方、橋渡し型ネットワークにおいても、多様性・異質性を内包する開放性ゆえに、やはり秩序維持のための規範遵守は不可欠となる。規範遵守の圧力が強まるほど、規範を逸脱した者に対する非難も大きなものとなり、不寛容の態度をとるようになると思われる。したがって、結束型・橋渡し型のいずれのネットワークにおいても、そのネットワークへのコミットメントが高い者ほど、秩序を乱す他者に対する厳格さの度合いは増大することも考えられるであろう。

本稿では、以上のような点を確認していくことになる。上述のような関連が実際にみられるのかどうかを、計量データを用いて検討することが本稿の課題である。

2.4 分析に使用するデータと変数

前節で述べた問題を検討するため、分析に用いるのは「大学生の意識と生活実態についての調査」のデータである。この調査は、同志社大学社会学部における2016年度「社会調査実習」において、2016年11月に同大学の学生を対象として実施された。有効回答数は340名（男性144名・女性196名）、有効回収率は54.8%である。

この調査の調査票に含まれる変数のうち、今回の分析では、寛容さに関する変数のほか、結束型・橋渡し型ネットワーク資源に関連する諸変数、また、規範遵守や対人関係に関する意識、政治的諸態度などを取り上げる。

寛容さ／厳格さを測定するための尺度項目として用いるのは「悪いことをした人は、いくら謝っていようと許せない」「問題を起こした芸能人が謝罪会見を開かないのは許せない」「ささいな迷惑行為も見逃さないことが重要だ」の3項目である。これらの質問項目はいずれも「そう思う」から「そう思わない」までの5件法で回答されている。「そう思う」に1点、「そう思わない」に5点を与え、この3項目の合計得点を寛容性得点（3～15点）とする。

また、結束型および橋渡し型ネットワーク資源は次のように測定する。今回の調査票には現在のネットワーク参加を尋ねる質問項目が含まれないため、結束型ネットワーク資源については「子どもの頃」「高校生の頃」の状況で代替することとし、子どもの頃に「家は和気あいあいとしていた」「親と一緒に遊んだ」、高校生の頃に「親には気軽に悩みを相談できた」「家は心からほっとできる場所だった」「親友と呼べる友人がいた」の5項目を

用いる。いずれの項目も「当てはまる」から「当てはまらない」までの5件法で回答されており、「当てはまる」を5点として得点化している³⁾。なお、これら5項目のうち前4者を「家族ネットワーク資源」、最後の1項目のみを「高校時親密ネットワーク資源」としても用いている。

橋渡し型ネットワーク資源については、その資源量を直接測定できる質問項目がないため、橋渡し型ネットワークにおいて形成される志向性である「開放性」をどの程度有しているかという点によって代替する。「周りの幸せのために自分の幸せを犠牲にしたくない」「自分と関わりのない人が不幸になっても、大して気にならない」の2項目を用いた⁴⁾。この意識は、「自分さえよければよい」「他人がどうであろうと知ったことではない」といった他者と関係をもとうとしない閉鎖的な志向性を、逆方向に測定しようとしたものといえるであろう。

3 寛容さ／厳格さと社会的ネットワーク資源との関連

3.1 寛容さと関わる基本的な変数

ネットワーク資源の効果を検討する前に、寛容性得点がどのような変数と関連しているのかを確認しておく。

近年の厳罰主義的な物言いは、「謝罪すべきだ」「罰せられるべきだ」と断じる姿勢から、権威主義的態度との関連をまず指摘できるだろう。また、「自分が圏外でいられるならば、他人のことなどどうでもよい」という価値観は、利己的で、自分のことしか念頭になく他者への関心が希薄であるような人物像を想起させる。逆に、寛容さは利他性・愛他性や、他者への配慮といった性質と結びつけて考えられることが多い。

このような寛容さ／厳格さと関連していることが想定される諸変数と、前節で作成した寛容性得点との積率相関係数を示したのが表1である⁵⁾。

表1 寛容性得点と諸変数の相関

	積率相関係数	有意確率	N
権威主義的態度	-.179	.001	334
政治的有効性感覚	.117	.032	335
社会保障制度への賛意・平等志向	-.012	.820	334
競争志向	-.264	.000	335
規範遵守志向	-.101	.066	333
社会参加意欲	-.024	.658	334

権威主義的態度との間には有意な相関があり、権威主義的であるほど寛容でないという傾向がたしかに存在する。また、政治的有効性感覚が強いほど寛容であるという傾向もみられる。しかし、社会保障制度への賛意や平等志向と寛容さとの関連はみられない。他者に対して寛容さを示す者が、必ずしも社会的弱者への富の再配分や格差是正を政策として肯定しているわけではないことがわかる。本稿で測定している寛容性とは、「社会としてどうあるべきか」という観点ではなく、「個人として他者とどのように関与するか」ということが問われる場面において表出されるものなのかもしれない。

その意味で、「自分の目標を達成したい」「他人には負けたくない」「不利益を被りたく

ない」といった競争志向や、規範に従うことに関する規範遵守志向と寛容性の間に関連がみられることは理解しやすい。競争に勝つことを重視するかどうか、規範を遵守しようとするかどうかは、自分の側でコントロールできる範囲内の問題であり、他者の意向とは無関係だといえる。それゆえこれらの志向性が寛容さと関連を示すのだと思われる。また他方で、寛容性が社会参加意欲と関連していないことも納得できる。寛容性はあくまでも「個人として」他者を許せるか、受け入れられるかという意識であり、「社会全体での」利他性や、社会の中で助けを必要とする他者へのやさしさとは少々次元を異にすると考えられる。したがって、寛容な人が社会全体の利益を追及する志向性の持ち主であるとは必ずしもいえないのである。

3.2 社会的ネットワーク資源が寛容性に示す効果

では、2つのネットワーク資源と寛容さとの間に関連はみられるだろうか。表2に寛容性得点との相関係数を示している。

表をみる限り、結束型ネットワーク資源の量と寛容性との間には、ある程度の相関があるといえる。今回の分析で使用している資源量は現在のものではなく、子ども・高校生の頃のネットワークである点には留意する必要があるが、結束型ネットワーク資源の量が多い者ほどむしろ寛容でなくなることが結果から示唆されている。他方、橋渡し型ネットワーク資源の指標としての開放性志向は、寛容性得点との間に有意な正の相関がみられる。開放性志向が強い者ほど寛容であるといえそうである。

表2 寛容性得点とネットワーク資源の相関

	積率相関係数	有意確率	N
結束型ネットワーク資源（子ども・高校生の頃）	-.098	.075	333
家族ネットワーク資源	-.095	.084	333
高校時親密ネットワーク資源	-.136	.013	333
開放性志向	.199	.000	333

ここでは、開放性志向のほうがより顕著な関連を示している。しかしながら、この結果だけをもって結束型ネットワークの影響が小さいと判断することはできない。というのも、前節で設定した①～④の仮説のように、結束型ネットワークも橋渡し型ネットワークも、一方で寛容さを醸成に寄与する素地をもちながら、他方で不寛容さを生み出す要因ともなりうるという二面性を有していることが想定されるからである。

両ネットワークにおけるこうした二面性の可能性を考慮しつつ、別の角度からの検討を次節でおこなうことにしたい。

4 ネットワーク効果の交互作用の確認

4.1 4類型の構成とその基本的傾向

社会的ネットワークの効果を検討する際に見落とすわけにはいかないのは、個々人は複数のネットワーク資源を有しているという点である。結束型と橋渡し型のいずれかのネッ

トワーク資源しかもたない者もいれば、双方の資源をともに豊かにもっている者もいる。すなわち、ネットワーク単体としての効果だけでなく、双方が組み合わせることによる効果についても検討する必要がある。

このことに関して、中山 [2016] は、結束型・橋渡し型のネットワーク効果が重なることで、社会・政治参加の促進効果がより高められるという交互作用がみられることを明らかにしている。この知見をふまえるならば、ネットワーク資源の組み合わせが寛容さの醸成に違いを及ぼしている可能性を考えることができる。そこで以下においては、2つのネットワーク変数を組み合わせを用いて、さらに検討を試みたい。

結束型ネットワーク資源と橋渡し型ネットワーク資源は、基本的には相互に独立のものともみなすことができる。それぞれのネットワーク資源の多寡によって上位群・下位群を組み合わせることで4類型を作成したいのだが、先述のとおり、今回の調査票では両ネットワーク資源を直接測定できる質問項目がなかったため、表2に掲載した子ども・高校生時の「結束型ネットワーク資源」および「開放性志向」で代替することとした。これらの主成分得点を結束型ネットワーク資源得点・開放-閉鎖志向得点として用い、両者を組み合わせで4類型を構成する⁶⁾。

この類型の妥当性を検討するためにも、まずはこれら4類型がどのような傾向をもっているのかを確認しておく。表3は、自己効力感や孤独感、互酬性に関する意識を類型別に比較したものである。

表3 4類型別にみた自己効力感、孤独感および互酬性規範意識

	結束型資源 多		結束型資源 少		全 体 平 均	有 意 確 率
	開 放 (95)	閉 鎖 (72)	開 放 (94)	閉 鎖 (70)		
自分のことが好きだ	3.46	3.73	3.12	3.35	3.42	.003
今、自分は幸せだ	4.18	4.07	3.77	3.54	3.89	.000
物事をやり遂げる自信がある	3.86	3.71	3.67	3.49	3.68	.071
自分はごくまともな人間だと思う	3.61	3.71	3.32	3.36	3.50	.028
自分は孤独だと感じる	2.72	3.02	3.19	3.31	3.06	.006
人に頼られるのは嬉しい	4.28	4.36	4.32	4.04	4.25	.190
人の力はできるだけ借りたくない	2.72	3.08	3.07	3.20	3.02	.049
自分の生き方は自分で決めなければならない	4.00	4.19	3.88	4.10	4.04	.067

()内はN

註) 表中の数値は類型別に算出した平均得点である。数値が高いほど、その項目の傾向が強いことを意味する。

自分のことが好き、自信があるなど、自己を肯定的に評価しているのは、結束型資源が豊富な2類型である。逆に、孤独感が強いのは、結束型資源の少ない2類型である。結束型ネットワークで形成される強い紐帯が、孤立を防ぎ、自己効力感を高めているといえる。

互酬性に関しては、「人に頼られるのはうれしい」という気持ちには類型間で有意な差はみられないものの、結果が示している傾向は、結束型資源が乏しく閉鎖志向の強い者が最も低く、同時に「人の力はできるだけ借りたくない」という意識も強い、というものである。他者と関わらずに済ませたいタイプではないかと予想される。また、結束型資源が豊富で閉鎖志向の強い者も「人の力は借りたくない」という傾向が強くと、互酬性規範があ

まり実感されていないといえる。閉鎖志向が強い者は「お互い様」意識が相対的に希薄であるといえる。

表3で確認された各類型の傾向は、パットナムの指摘とも、中山〔2016〕における分析結果ともおおむね合致している。今回の類型構成に用いた尺度は両ネットワーク資源を測定する指標としては十分とはいえないが、少なくとも代替的な役割を果たしうるものであるといえそうである。

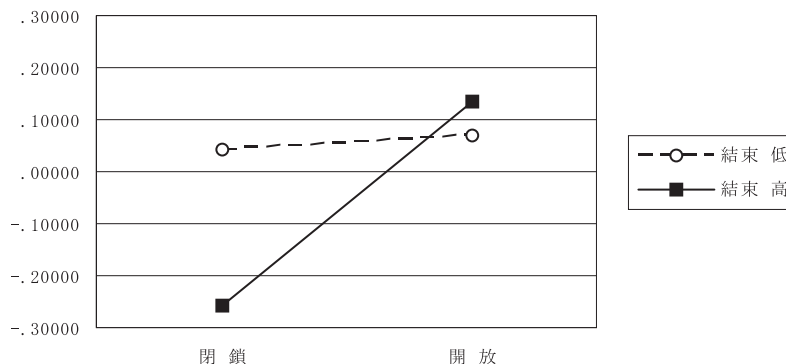
4.2 4 類型別にみた寛容性の相違

では、寛容性についても2つのネットワークの交互作用を確認してみよう。表4および図1は、寛容性得点を4類型で比較した結果である。なお、図1では寛容性得点を標準化して比較した結果を示している。

表4 4 類型別にみた寛容性得点の比較（平均値の差）

	結束 低	結束 高	全 体		F値	有意確率
閉 鎖	10.12	9.38	9.74	主効果	1.162	.282
開 放	10.19	10.35	10.27		3.740	.054
全 体	10.15	9.86	10.00	2次交互作用	2.790	.096
				モデル	2.576	.054

図1 寛容性得点の比較（標準得点）



分析結果をみると、まず主効果として開放性志向が有意な影響を与えていることがわかる。表2でも示されていたように、ネットワークの単独の効果としては、閉鎖-開放の志向性の方が寛容さには影響するようである。

ただ、さらに注目すべきは、主効果よりも開放性志向と結束型ネットワーク資源の間に交互作用効果がみられている点である。図からは、閉鎖的な志向をもつ者と開放的な志向をもつ者の寛容性の違いは、結束型ネットワーク資源が高い者において顕著に表れていることがわかる。閉鎖的な志向をもち結束型ネットワーク資源の高い者は、極端に寛容性が低い。すなわち誰よりも不寛容・厳格なのである。同質的な者どうしが結束を強め、「自分たち」の気分や価値観と相容れない者を許容しない。このような傾向は特に、開放的な志向を有しない閉鎖的な志向の人びとにおいて表れる現象だと考えられるのである。

4.3 寛容性の規定要因としてのネットワーク効果

最後に、ネットワークが寛容さ／厳格さを規定する変数として、どの程度の効果をもっているのかを検討する。ここでは、寛容性得点を従属変数、関連する種々の意識およびネットワーク類型を独立変数とした重回帰分析をおこない効果を確認する。なお、分析にあたってネットワーク類型は、ダミー変数を作成し用いている。具体的には、「結束型ネットワーク資源のみあり」の類型を基準（0）として、「双方なし」「開放性のみあり」「双方あり」をそれぞれ1とするダミー変数を作成している。

表5 寛容性得点を従属変数とした重回帰分析結果

説明変数		β	有意確率
自己効力感		-.028	.625
政治的効力感		.069	.211
権威主義的態度		-.090	.112
社会的保障制度への賛意・平等志向		-.048	.368
競争志向		-.205	.000
規範遵守志向		-.074	.181
ネットワーク類型ダミー	双方なし	.125	.058
(基準：結束型資源のみあり)	開放性のみあり	.122	.070
	双方あり	.190	.005

$R^2 = .120$ 有意確率 = .000

分析の結果が、表5である。表から、まず種々の関連する意識のうち、競争志向が有意な負の効果をもっていることがわかる。競争に勝ちたいという意識をもつ者ほど、寛容ではなくなるようである。競争志向以外の意識は明確な関連を示していないことから、種々の意識・態度の中で、競争志向が寛容性に最も大きな影を落とすものだとはいえる。

ネットワーク類型については、すべてが有意な効果を示している。このことから少なくとも、人びとの有するネットワーク資源のありようもまた、寛容性に一定程度の影響を及ぼすということができる。すなわち、現実に他者とどのような関係をもっているかが、他者に対する寛容性を左右する大きな要因になっているのである。しかも、その結果が示す意味は重要である。表4の分析結果から、閉鎖的な志向をもつ者のうち結束型ネットワーク資源を多く有する人びとは誰よりも不寛容・厳格であること、ネットワーク資源を多く有して開放的な志向をもつ者は最も寛容であることなどが確認されていた。この傾向は、表5においてもまた顕著な効果としてみられている（「双方あり」が有意な効果）。

他者との関係を構築していくうえで、閉鎖的な志向（すなわち橋渡し型のネットワークを有しないこと）は寛容さを低下させる。その傾向は、本人がネットワークをもっていない場合ではなく、むしろ結束型のネットワークが豊かな場合に強化される。逆に言えば、結束型のネットワークに開放的な志向（すなわち橋渡し型ネットワークを有すること）が組み合わさることで、不寛容さ・厳格さを緩和することができるという可能性が考えられるのである。

5 おわりに

本稿では、近年に頻繁にみられるようになった他者を「許せない」「罰してやりたい」といった非難・攻撃の志向性を、寛容さ／厳格さの態度として位置づけ、寛容さの形成にネットワークが寄与しうるのかという観点から分析をおこなった。R. パットナムが指定した結束型ネットワークと橋渡し型ネットワークは、従来指摘されてきた政治参加行動の促進効果だけでなく、寛容さの醸成にとっても意味をもちうることを示されたといえる。

2形態のネットワーク資源のうち、寛容さ／厳格さに単独効果としてより影響を及ぼしているのは、橋渡し型ネットワークの特性である開放性志向である。この志向性が高い者ほど他者への寛容さを示すといえる。ただし、その効果は結束型ネットワーク資源のあり方によって異なりうる。結束型ネットワークが豊かではない場合、開放性志向は寛容性にあまり関連しない。しかし、結束型ネットワークが豊かな場合は、開放性志向が低ければより不寛容・厳格に、開放性志向が高ければより寛容になることが明らかとなった。

このことは非常に示唆的であると筆者らは考える。異質な他者とも関わる経験を蓄積し、多様なネットワーク資源を獲得することなくして、寛容さを身につけ、高めていくことはできないのである。本稿の分析結果は、個人化の進展する現代において、このように他者と連帯することの意義を改めて示していると同時に、共同社会を再構築するための課題を示すものであったともいえるからである。

さて、少なくとも寛容性を考えるうえで重要なのは、開放性志向とそれに大きく規定される橋渡し型ネットワークだということになる。では、そのような開放性志向（と橋渡し型ネットワーク）はいかにもたらされうるのか。

人と「つながること」を個人がどうとらえるか、他者とどのような関係を取り結んでいきたいかといった志向性は、一朝一夕に形成されるとは考えにくい。筆者らは、こうした意識は長い年月をかけて、様々な経験を通して、徐々にできあがっていくものではないかと考えている。つまり、過去からどのような知識を積み上げてきたのか、何を見て何を考えてきたのか、という点が大きく関係していると考えられるのである。

ここで興味深いデータを示したい。表6は、本人がこれまでどのくらい、いわゆる「教養」に触れてきたのかを「知識・鑑賞経験」として得点化したものを、4類型別に比較した結果である。例えば読書については、夏目漱石や芥川龍之介、谷崎潤一郎、ドストエフスキー、ユゴー、ヘッセといった古典から、村上春樹、小川洋子、東野圭吾ら現代の作家まで42名の小説家を挙げ、「知らない」に0点、「知っているが読んだことはない」に1点、「読んだことがある」に2点を与えて42の回答の合計得点を算出している。同様に、音楽

表6 4類型別にみた読書および教養全般の知識・鑑賞経験の比較

	結束型資源 多		結束型資源 少		全体平均	有意確率
	開放 (95)	閉鎖 (72)	開放 (94)	閉鎖 (70)		
小説家に関する知識・鑑賞得点	36.06	35.00	37.01	40.89	37.20	.089
小説家、音楽家、美術家、映画監督に関する知識・鑑賞得点	65.30	64.86	68.13	73.60	67.94	.077

() 内はN

家、美術家、映画監督についてもその認知と鑑賞経験を尋ねており、先の読書得点を加えた全4領域の合計得点を「教養全般」の得点としている⁷⁾。

この表から、4類型のうち開放性志向の高い2グループは、(最も不寛容であった)「結束型資源多・閉鎖」に比べて、読書・教養全般のどちらも得点が高いことがわかる。これはすなわち、開放性志向の高い人びとの方が、相対的に「教養」に触れている程度が高い可能性を示唆している。さまざまな小説や音楽、美術や映画に触れることで、仕事上のスキルのような実践的な知識が得られることは少ない。それゆえ今日ではこうした意味での「教養」を軽視する雰囲気があるように思われる。だが、ここでの結果をみる限り、そうした「教養」はやはり今日の人びとにおいても重要なものだといえる。それは人びとの見識を広め、多くの社会に目を向ける契機となり、それがやがて寛容さにも結びついていく意味をもちうるからである。

ところで、表6では結束型ネットワーク資源が少なく閉鎖的志向である類型(「双方なし」類型)が、最も本を読んでおり、芸術一般に対する知識や鑑賞経験が高い傾向も示されている。先の表5においても、「双方なし」もまた寛容性得点に影響を与えていた。さらに、本稿ではデータとして示していないが、彼らは社会参加意欲も高いのである。関係資源となるネットワークを有していない彼らもまた寛容である、という結果をどのように考えたらよいだろうか。

筆者らは、「双方なし」の人びとの結果は、寛容性を高める別のかたちが存在している可能性を示していると考ええる。こうした人びとは、ネットワーク資源には恵まれていない。言ってみれば彼らは、他者から排除されるという経験を他の者よりも多くしているのである。そのような彼らが、誰よりも多く本を読み、誰よりも多くの絵画や音楽に触れている。それは彼らが、現実の世界では得にくかった経験を、本や絵画、音楽や映画を通して得ようとしているとすれば納得できるだろう。他方で、多くの作品を通してさまざまな思想や異質な文化、歴史、感情に触れる体験は、先に述べたように見識を広め、多くの社会に目を向けるような態度を形成する。このとき、他者から排除された経験があることによって、教養がより寛容さに結びつきやすくなるかもしれないのである⁸⁾。このように考えると、寛容性に結びつく道は、社会的ネットワーク資源が豊富であることだけではないといえる。仮にそのような資源に恵まれなかったとしても、寛容さを形成することは十分可能であるといえるだろう。

ネットワークの豊富さと関係しつつ、寛容さを高める(不寛容さ・厳格さを緩和する)鍵となるのは、人びとの「教養」に対する態度である。それゆえ今日のような社会においても決して「教養」を軽視せず、むしろ人びとに多く「教養」に触れる機会を開くことが大切なのではないかと筆者らは主張したい。

註

- 1) ただし、「インスタ映え」を意識した自分を“盛る”行為や、ときには高額のサービスを利用してまで“リア充アピール”をする行為に対しては、第三者からは揶揄・非難されるが、仲間内からは“いいね!”が付与される。自身を「盛る」ことはいわば虚偽の自己申告であり、仲間に対して「不誠実」な行為ととらえることもできるが、親密ネットワーク内においては「盛る」ことを前提としたコミュニケーション

ンが相互のお約束となっており、むしろその努力が評価されているともいえる。

- 2) なぜ厳罰化を求めるのかという観点からの考察としては、例えば松原英世 [2009] の実証研究がある。松原は、厳罰化への支持は犯罪抑止の効果を期待してではなく、「刑罰を科さなければ社会の凝集性が失われる」という恐れや不安の意識にもとづいていることを示している。
- 3) 5項目を主成分分析にかけたところ、第1主成分のみが抽出された。分散の説明率は50.5%である。
- 4) 主成分分析による第1主成分の分散の説明率は73.3%である。
- 5) 表1の各変数の尺度化の方法は以下のとおりである。尺度構成に用いた質問項目はすべて5件法による回答形式である。なお、()内の数値は、用いた項目の主成分分析で抽出された第1主成分の分散の説明率である。
 - ・権威主義的態度
「権威ある人には常に経緯を払わなければならない」という質問項目を用いている。
 - ・政治的有効性感覚
「政治や社会を変える力なんて自分にはない」「デモ行進なんて、ばかばかしいと思う」の2項目の回答を反転させて用いている (64.3%)。
 - ・社会保障制度への賛意や平等志向
「豊かな人からの税金を増やしても、恵まれない人への福祉を充実させるべきだ」「競争の自由をまもるより、格差をなくしていくことの方が重要だ」の2項目を用いた (68.6%)。社会全体としての格差の是正や平等への志向性がみられるかを測定しようとしている。
 - ・競争志向
「欲しいものはなんとしてでも手に入れたい」「大金持ちになりたい」「他人には絶対に負けたくない」「これからの生活や仕事で、損は絶対したくない」の4項目の得点の合計である (55.4%)。
 - ・規範遵守志向
「たとえルールでも、自分が納得できなければ守らない (反転項目)」「決められたルールである以上、それに従うのは当然だ」の2項目の合計を用いている (67.6%)
 - ・社会参加意欲
「老人ホームでの手伝い」「障がい者施設での手伝い」「ホームレスへの炊き出し活動」に「参加したい」か「参加したくない」かを尋ねた項目を用い、いわゆる社会的弱者を支援する活動への参加意欲を測定している (82.1%)。
- 6) 類型は、結束型ネットワーク資源 (全項目の合計点)、開放性志向のそれぞれについて、得点をもとに人数が半分になるように全体を2分割し、両得点の高低の組み合わせによって作成している。各類型に含まれる人数は、「結束型資源多・開放型」95、「結束型資源多・閉鎖型」72、「結束型資源少・開放型」94、「結束型資源少・閉鎖型」70である。
- 7) 表6に掲載した知識・鑑賞得点は以下の手順で作成されている。

調査票では「小説」「音楽」「美術」「映画」の各分野への興味を問う質問として、以下のような古典から現代にわたる著名な小説家、音楽家、美術家、映画監督の名を挙げ、それらの認知・鑑賞の程度を回答してもらっている。調査票のリストに挙げられた音楽家はバッハ、モーツァルト、ショパン、ドビュッシー、マイルス・デイヴィス、ビル・エヴァンズなど12名、美術家はミケランジェロ、ミレー、ゴーギャン、ピカソ、クリムト、葛飾北斎、岡本太郎ら16名、映画監督はヒッチコック、キューブリック、黒澤明、小津安二郎らの6名である。彼らについて「知らない」を0点、「知っているが読んだ (鑑賞した) ことはない」を1点、「読んだ (鑑賞した) ことがある」を2点とし、その総得点を知識・鑑賞得点とした。

得点が高いほど、各分野の芸術に触れている程度が高いことを意味する。

- 8) 本稿で用いていた社会参加意欲は、具体的には社会的弱者に対する支援活動への参加意欲であった(註5参照)。この点をふまえても、「双方なし」の人びとがより教養に触れているとともに社会参加意欲が高い点も十分納得できよう。

文献

浅野智彦, 2011『若者の気分 趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店.

小林久高・山本圭三編, 2017『同志社大学 社会調査実習報告書——2016年度大学生社会意識調査——』同志社大学社会学部社会学科.

松原英世, 2009「厳罰化を求めるものは何か——厳罰化を規定する社会意識について——」『法社会学』71:142-158.

中山ちなみ, 2016「政治参加における社会的ネットワークの効果に関する考察——結束型と橋渡し型ネットワークの交互作用に着目して——」『ノートルダム清心女子大学紀要 文化学編』41-1:21-39.

西岡暁廣, 2014「厳罰意識の構造」『同志社社会学研究』18:11-25.

Putnam, Robert David, 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster. (=2006, 柴内康文訳『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生——』柏書房.)